



### インド病院建設起工式挙行

クシナガラ(北インド・UP州) 1997年1月17日

インド福祉村協会と現地

アーナンダ協会との合同主催で

去る1月17日にUP州

クシナガラ(北インド)にて病院

建設の起工式が来賓約70名を

招いて盛大に行われました。

式典はヒンズー教の地鎮祭・祝典・

佛式による除幕式と3部構成で

子供達を含めて地元の人々

約500名が参列しました。



### 起工式・式辞

理事長 山本孝之(福祉村病院理事長)

インド福祉村の起工式にあたり、御多用の中ご出席いただいた来賓の皆様、心より厚くお礼を申し上げます。さて、自分ひとりが幸せになろうとするのが最大の不幸であると考え、我々はみんなの力でみんなの一生の幸せと健康を守ることをモットーとして毎日働いております。私達日本人は、約千五百年前に仏教が日本に渡来してから、ずっとお釈迦様の教えに従って生きてきました。そこで私達は、インドの人々の幸せと健康に奉仕するために、インドに福祉村を作ることをお願いいたしました。最初に病院を建てますが、次には、老人ホームや障害者施設などの福祉施設や学校を作る予定です。どうか、今後とも我々にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。本日は盛大な起工式ありがとうございました。

# クシナガラ病院のために

会長 飯島宗一  
(元名古屋大学学長)



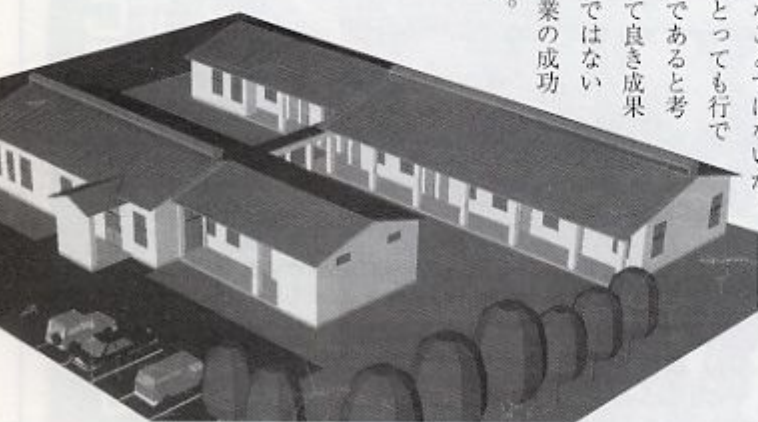
柴田昌雄博士はじめ、インド福祉村協会の諸君は、かねてから仏教者の立場で釈尊涅槃の地クシナガラに病院を建設し、現地の人々の医療福祉に寄与したいということを発願され、インドの友人と連絡をとり、国内での有志によびかけ、計画を着々と進めてこられたが、この程現地の病院建設が具体化し、平成九年一月十七日には、その起工式を挙行しうるに至った。仏教は古代からのインド医学の流れをも包摂しつつ形づくられたものであり、老、病、貧、死からの衆生の救済を柱にしているといわれる。その根本の精神にもとずいた、「インド福祉村協会」の事業はまことに意義深く、それが初期の目的を達し、よい成果を納めることを私どもも心から願ひ、出来る限りのお手伝いをしてほしい所存である。インドは人類社会のなかで、おそらくもっとも早く文明が明けた地域で、精神的遺産の宝庫といつてよい地域であるが、近代の歴史では長く植民地としての苦しみを味わい、第二次大戦後ようやく独立を果たし、一つの大国としての道を歩みつつある。医科大学や研究所も多く、現代医学の水準においても見るべきものがあるが、何分にも膨大な人口を擁し、その大多数はなお貧困であつて、広い国土の隅々まで医療、福祉が十分にゆきわたっているとはいえない。人々の栄養状態も良好とはいえず、新生児死亡率は高く、平均余命も短い、感染症その他の疾患も多い。この状態に医療援助の手をさしのべるのは、人間

としての一つの義務であるということが出来る。しかしその場合注意すべきことは、「富める先進国日本が貧しい遅れた国インドを助ける」いった一種のおごりの気持ちは、これを捨てることである。また、「国際貢献をしなければ地球社会での日本の評判はわるくなり、ひいては日本の将来も危うい」という打算もまじえるべきではない、純粹に仏教の心、医師としての天職に従ひ、インドの人々と相携え、また彼らの自主性と誇りに敬意をはらつてのいとなみでなくてはならぬであらう。それは容易なことではないが、私達自身にとつても行であり、勉強であると考へ、努力して良き成果をあげようではないか。この事業の成功を切に祈る。



クシナガラ地区に建設される「インド福祉村病院」の完成予想図。

クシナガラ地区に建設される「インド福祉村病院」の完成予想図。



病院名・礎石除幕式  
理事 高木元貞(慈専寺住職)

## 表白

敬つて、アミターバ・アミターユス(宇宙の意志、無量の寿命、無辺の光、の意味)の尊前に申して曰く。以れば、濁世全人類の教主釈迦如来、王舎城、耆闍崛山に在しし時、顔容端嚴として五徳端現し給ひ、尊者アーナンダの請問によりて、眞実の教えを説き給う。中略

我等、未代濁世の群萌、齊しく同じく、速やかに三界を過ぎて志願満足を得るは洵に二尊の加備あればなり。よつて曰く

如来興世之眞説 奇特最勝之妙典

一 棄究竟之極説 速疾円融之金言

十方称讃之誠言 時機純熟之眞教 と。

幸いなるかな我等末世の群萌三國の祖師世々の善巧知識の化導によりて、遇い難き眞実教に今遇うことを得たり。謝せざんばあるべからず、報ぜざばあるべからざるものか。故に、相共に眞実報土の行道を歩まんと欲し、遇々の縁に催され「インド福祉村」建設を発起するに至れり。爾来、十有余年、幾多の苦節を経ると謂も、佛天のもと、先輩諸師、数多の同朋知友の合力を得て、本日ここに、釈迦牟尼仏陀涅槃の地クシナガラの聖地に於いて、「アーナンダ、ミツシヨン」の名をもて、第一期・チャリナイ、ホスピタル「アーナンダ」の起工式を挙行するに至れり。偏に印・日、群萌に根ざす同朋社会の顕現を願うが故なり。仰ぎ願わくは、志を同じくする者、必ず無上殊勝の本誓を受行し、如来大悲の教勅を奉持して、報恩謝徳の誠を尽くさしめんことを。伏して乞う、哀慈照護したまえ。

1997年1月17日

インド福祉村協会・アーナンダミツシヨン一同 敬つて申す。

# 式典報告

常務理事 柴田昌雄  
(愛知学院大学教授)

私どもが北インドに病院を建設する事を発願してから10年、漸く去る1月17日に建設起工式を現地(北インド・クシナガラ)で挙行することが出来ました。現地は釈尊入没の地(クシナガラ涅槃堂)より西へ約3キロの純農村地帯です。8.エーカー(約2000坪)の建設用地の周囲は刈り取りを間近にした砂糖黍畑です。乾期とは云え緑濃いすばらしい環境の処です。当日は好天のもと日本の陽春4月を想わせる爽やかな日でした。用地中央には赤、黄、緑などの色鮮やかな天幕が張られ、式典場が作られました。式には来賓として約70名の方々が招待されました。インド側よりはこの地区(日本の県に相当するもの)の衛生局長、首長、公立病院長など、日本側よりはデリー・日本大



使館より谷野大使の代理として川上良参事官、JICA(国際協力事業団)のデリー日本事務所の熊野所長、ウッタール・プラデシュ(U.P)州の州都ラクノーにあるサンジャイ・ガンジー医科大学研究所(S.G.P.G.I)よりJICAのチームリーダーの星野先生(名大医学部名誉教授)、JICAのコーディネーターの小原氏夫妻の5名の方々がご臨席下さいました。また地元の老若男女約200名、特に本場に多くの子供達約300名位が参集しました。起工式は午前11時頃より開始されました。まず建築予定場所の一隅に約1m四方、深さ約50cmの穴が掘られこの穴を中心にして中央にヒンズー教の僧侶一名が司祭者として座り、参列者が周囲にずらりとすわりました。日本で云う地鎮祭がヒンズー式に行われました。地の神に建設の安全と成功を祈るため、お祈りの言葉とともに穴の中に水、米、花などが撒かれました。式の終わり頃には薪が焚かれ、丁度日本の護摩と同じ様な儀式も行われました。その後、参加者全員が天幕の式典場に移動しました。中央に壇がありインド側、日本側それぞれ数名が座りました。まず日本側インド福祉村協会山本理事長の式辞が豊橋福祉村施設長の井川氏によって日本語で代読され、さらにヒンズー語で翻訳して述べられました。その式辞の中で「私どもはすべての人々が幸せにならなければ、本当の幸せにはなれない」との言葉は参列者に深い感動を与えました。その後、各来賓の方々からも祝辞が述べられ、最後に私がお礼の言葉を述べさせていただきました。私はお礼の



アーナンダ病院の建設地

言葉を述べさせていただきながら、ここまでに至った10年間の道程を想起しながら、これから病院を完成させるまでが本場の正念場だといった気持ち強く抱きました。最後に病院名(現地での名称は釈尊の弟子のアーナンダ・阿難尊者の名前より、アーナンダ病院となりました)を刻んだ石のプレート除幕式が行われました。これは仏式で執り行われました。導師は高木師(インド福祉村協会理事)がされ、三篇依文がパーリー語で朗唱され、表白文も読まれ、散華も執行されました。以上が起工式の模様です。前に述べました如く、起工式の一つの節目として、これから本格的に病院建設工事に入ることとなります。まだまだ資金面でも不十分でして、これまで以上に有縁の方々のご支援をお願い申し上げる次第です。現地の人々は一日も早い病院の完成を待望しております。私もこのインドの人々の期待に応えるべく、一歩一歩努力を続ける所存であります。

# 募金のお願い!

私達はインドの人々に医療と生活改善を無料で行うことを目的としております。

インドは最近特にインフレ状態にあり建設費も高騰しております。

建設後も医療器具、備品、維持費に相当不足が見込まれます。

みなさんにお寄せいただいた善意はAPIC(国際協力推進協会)事業団を通じて  
インド・アーナンダ協会に寄付され活動に使わせていただきます。

少しでもあなたの善意を分けて下さい。

寄付先/住友銀行 東京公務部 普901404(財)国際協力推進協会「ブダガヤ病院建設」口  
問い合わせ先/インド福祉村協会事務局



病院建設用地から約1km以内に点在する部落で建設用地に立っている砂糖黍畑の中から5〜10人と子供達が集まってくる。子供達の案内で元地主で用地の管理をしているアルビンド・クマール・バルマ氏の自宅を訪問した。50軒位の草ぶきの部落で一部レンガづくりの家もあり中央の広場に井戸と牛が群がっている。瞬間に50名位に囲まれ紅茶、甘菓子を出され歓迎された。中学生位の学校へ行っている子供の英語を通して大人との意志疎通をはかったが、彼等の美しい目を見ているだけで暖かい心が通じる気持でした。3回部落を訪問したが最後にやっと母親が子供を抱かせてくれたり、握手をしてくれた。心暖かくなる歓迎であり必ず病院建設を仕上げる決意を強くしました。

S-I-R-S-I-A 部落の人々

評議員 大竹紘一

法人紹介

ANANDA MISSION  
CHARITABLE TRUST  
(インド、ヒールデー市)

インドの人々への自然的奉仕を果たすべく創設された。カースト、皮膚のいろ、宗教、性別を問わず、その他いかなる自然および人為的差別を超えて人民の幸福のために実践することを目的としている。インド国内で設立認可を得るに3年を擁し許可が下りるまで大変難しい中で設立された。



インド福祉村協会  
(INDIA WELFARE VILLAGE  
SOCIETY 日本・豊橋市)

インド国内の地域住民へのプライマリー・ヘルス・ケアを中心として保健・医療を充実させることを目的として、支援活動および不就学児童たちの基礎教育を充実させるための活動を進めると共に、日本とインドの相互理解を深め、両国の親善・交流に寄与することを目的として設立された。

会長 飯島宗一、理事長 山本孝之、常務理事  
柴田昌雄、理事 6名、評議員 15名

■募金/別紙銀行振り替え用紙にて下記口座へご送金下さい。  
この募金については税法上の優遇措置がとられます。確定申告時にご提出下さい。  
■振込先/住友銀行 東京公務部 普901404  
(財)国際協力推進協会「ブダガヤ病院建設」口

発行者 インド福祉村協会(IWVS)  
編集・発行人/大竹紘一  
インド福祉村事務局  
〒441 愛知県豊橋市野依町山中19-12  
TEL0532-48-1138 FAX0532-48-2365